

「雨二モマケズ」で始まる宮沢賢治^{みやざわけんじ}の有名な詩があります。この詩は賢治が晩年に病を患^{わすら}い、病^{びょうしやう}床にて記されたものといわれています。

雨にも、風にも、雪にも、夏の暑さにも負けない丈夫^{じやうぶ}な体を持ち、自分を考えに入れず、東や西、北や南の困っている、病^{やまい}の人、争いをしている人、あらゆる人をそこに行って救いたいという、当時病に伏せていた、宮沢賢治の切なる願いが記されています。

自分の事より、他の多くの人々の本当の幸せを願い、手をさしのべたい。まさに賢治が理想とする生き方を現^{あらわ}している詩といえるでしょう。

この詩は、仏教を深く信仰していた宮沢賢治が、お釈迦さまのことばに学んでつくられた、といわれています。

お釈迦さまは「目に見えるものでも、見えないものでも、遠くに住むものでも、近くに住むものでも、すでに生まれたものでも、これから生まれようとするものでも、すべての生きとし生けるものは、幸せであれ、安^{あん}穩^{のん}であれ。」ということばを残しています。

そして、自分自身を見つめ、思い上がらず、他の人にはことば優しく接しなさい、と弟子達^{さと}を諭したのです。

お釈迦さまは、人間は一人で存在しているのではなく、ほかの多くのつながりのなかで生きている。そのつながりの大切さを説かれました。

自分だけでなく、さまざまな苦しみからすべての人々を救おうという誓^{ちか}いを立て修行を続け、あらゆる人々を救って下さる仏さまを菩薩^{ぼさつ}といいます。

そして、菩薩の誓いを実行することは私たちにもできるのです、自分一人だけが幸せになるのではなくあらゆる人が幸せになるように願い、行動を起こす。その生き方が菩薩に近づく生き方となるのです。

宮沢賢治は別の文章で「世界ぜんたいが幸^{こう}福^{ふく}にならないうちは個人の幸福はありえない」と言っています。

私たちの本当の幸せとは、自分一人が幸せになるのではなく、他の多くの人々が幸せになるように願い、行動を起こすことによって現れてくるのではないのでしょうか？

賢治が記した、詩の最後は「サウイフモノニ、ワタシハナリタイ」で締めくくられています。

私たちも、菩薩の誓いを実践し、少しでも菩薩の生き方に近づけるように努力をしてゆきたいものです。

— 終 —